

吹上町中原発見の弥生式土器について

出口 浩

(I)



第1図 遺跡の位置(黒点)

昭和43年12月25日、上村俊雄氏と出口は吹上高校社会研究部員の協力を得て、花熟里遺跡第2次発掘調査を始めた。昼休みを利用して遺跡地周辺の分布調査を行った吹上高校生によ

って採集された遺物より、遺跡の存在を知り、早速現地におもむき散乱している弥生式土器片をひろい集めた。量は肥料袋のおよそ半分に達した。

遺跡地は花熟里遺跡から国道207号線を南へ約1kmの地点にあって、207号線の道路拡張工事中道路の東側部分より出土した様子であった。地表より1mはいかない深さの粘質の黒土の中に土器片が含まれていた。

なおこの遺物はそれ以後採集品として倉庫に眠っていたが、最近整理中見つけ出し、弥生時代後期のひとつの資料にでもと、本誌を借りて紹介する次第である。

(II)

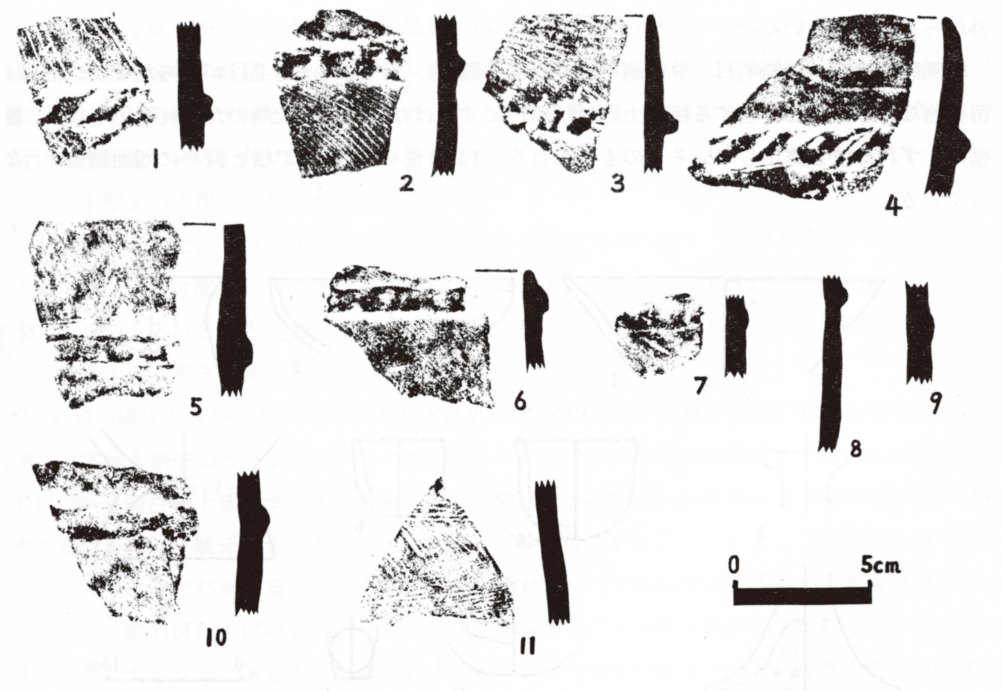
鹿児島県の西部に位置する薩摩半島には、北州山脈の支脈である出水山地と金峰山地がそれぞれ南北に走っている。東側は急崖をなして鹿児島湾へ至り、西側は日本三大砂丘のひとつに数えられている約40kmの吹上浜をはさんで、海岸線との間に細長い平野を形成している。

ここには金峰山地の丘陵地を開折する、万ノ瀬川、伊作川、永吉川、神ノ川など大小多くの河川があり、薩摩湖、亀原池などの砂丘湖がある。とくに吹上町永吉川から加世田市万ノ瀬川周辺にかけては、砂丘背後に低平な平野を形成している。その沖積平野が古代の水田経営に当てられていたのではないかという予想は、この地方に分布する多数の弥生時代の遺跡によって当然考えられることである。また高橋貝塚における夜臼式と高橋Ⅰ式土器の相伴事実は、北九州に発生した弥生文化を、海上交通を通していち早く摂取し、南九州の弥生文化のさきがけとなったことを示している。

遺跡地は金峰山地から西流する小野川と伊作川にはさまれた山地の一丘陵から低湿地の薩摩湖に至る平坦な標高約 40 m の台地上に位置している。

近くには後期で炭火米出土の花熟里遺跡①、南に約 2 km で中期の incoming 遺跡②、さらに前期の今田遺跡、小野貝塚、後期の宮内、中津遺跡（以上③）と弥生時代の遺跡が分布している。

(Ⅲ)



第2図 中原遺跡の土器実測図

採集土器片は、ほとんど甕形土器が大半をしめており、高坏形土器、小形手捏式土器、小形壺形土器、須恵器片などがあった。

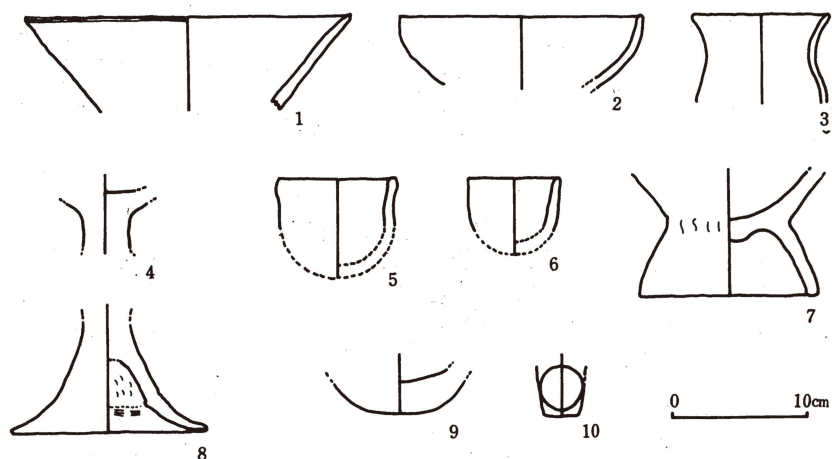
甕形土器(第2図・3図7)

口縁部片が10片ある。いずれも口縁端部より4~5cm下側に凸帯を張りつけ、さらにその凸帯上に右から左へ斜位に荒く篋状器具による刻み目を施している。(1~4・7)

刻み目が凸帯を越え器体にまで付されたもの(3)や刻み目を入れて加工された施文具で刻み目を附したもの(1・3)がある。また凸帯は指でつまんだように調整されたあとがみえ(3)、ほとんどが波状に曲っており水平にまっすぐ器面をめぐっていない。かまぼこ状の凸帯で刻み目のないもの(5・6・8~10)、口縁端部より下方8mmとほとんど口縁部に接して凸帯を施しているものもある。(6) 6は篋状器具による刻み目と異なり、指による浅い押文を施している。9・10は灰白色の色調を呈し器面がはげて胎土が露出している。刻み目のあるもの、ないものの二種類に分けることができよう。

色調は全体に黒褐色を帯び、作りは粗製のもので甕としての機能を重視した実用的な飾られない土器である。器面も刷毛目で斜めに荒い調整をしている(1~3)。断面は口縁部から肩部へ直口するバケツ状のもので、頸部にくびれのある「く」の字状の口縁部がみられない。4は口縁部端が丸味をおび、やわらかく内湾しており、5は口縁端がコの字形にきちっと調整され、やや外びらき直口している。

胴部破片は細かい刷毛目、荒い刷毛目で外面を調整し、内面には刷毛目がみられない。色調は黄褐色ないし黒褐色を呈する粗製土器で、黒色にすけたものや、火熱のため紅褐色をなし、器壁がくずれ砂粒を露出しているものもみられる。11は荒い刷毛目で横と斜めに器面調整を行っている。



第3図 中原遺跡の土器実測図

底部と確認される土器は8個ある。壺形土器の底部もあわせて述べると、中空上げ底の甕の底部2、ほかは壺形土器の丸底と思われる。個体数は甕2個、壺3個を数えることが可能である。

第3図7は直径が約13cmを測る大きな甕の底部で、器壁も厚く、かなりがんじょうな土器である。外面は黄褐色をなし、内面は灰褐色にすすけ、また脚の内面には赤褐色の凸起状のふくらみがみられる。胎土は砂粒子を含み粗である。器面を一部浅い刷毛目で調整し、脚台部の継ぎ目のところは指でおさえたあとが明瞭に観察できる。9は壺形土器の底部で、外面は刷毛目でととのえ、内面は器壁が剥落して砂粒子が露出している。

壺形土器(第3図 1・2・3・9)

小形壺形土器と思われる2・3と器形の不明なもの1をあげた。1は口縁部が大きく外方へ広がるもので、直径24cm、内面赤褐色、外面褐色を呈する。内面は無文であるがていねいに仕上げられ、外面は細い刷毛目で左から右への調整痕がみられ、頸部近くはへら状のもので仕上げられている。口縁端部は細い沈線を横位に荒くひいている。焼成のよいかかなりしっかりした土器である。器形は頸部より鋭く外方へくびれ、胴部の張った器体に平底ないし丸底がつくものと予測される。

2は精良な粘土をもちいた明褐色の精製土器である。外面は斜位に細かい刷毛目調整のあとがある。器形は碗状の杯部となって、高形土器とも考えられるし、この碗状の下部に腰のあった器体のつく小形壺形土器とも考えられる。④ 3は内外ともていねいに調整された黄褐色をなす薄手の小形壺である。丹塗のあととはみられない。

小型手捏土器(第3図5・6)

2個採集された。5は灰褐色をなす胎土の荒い粗製土器で口径7～8cmを測る。内面は指押文もみられ、外面は縦位に刷毛目がみられる。口縁部上面に平坦面をもうけている。6も赤褐色粗製のもので1とほとんど変わらない。内面篋状の施文具で横位に荒くひっかいている。

高杯形土器(第3図4・8)

16個の破片が採集され、そのほとんどは外面赤褐色を帯びた丹塗研磨の精製土器である。坏部片は内側も研磨のあとがみられる。脚台部から約5個以上の個体数を有していることがわかる。口縁部から脚台の上部に至るところ、すなわち碗状の坏の胴部から底部への堺に凹線がもうけられた破片があり、城元出土のもの⑤と同じタイプを示している。

8はゆるやかに広がる脚台で、外面の丹塗研磨に較べて内面は灰褐色をなし、裾部は刷毛目仕上げである。刷毛目仕上げの上部は手捏で中空部を整形し、その堺い目はやや屈折している。4は脚の根付に当る部分であるが、丹塗の器表面が剥脱して細かい粒子をみせ、盃部の内面は黧黒色で研磨のあとがみられる。

道路工事現場付近で採集したものは、以上の外に須恵器数片と第3図10の遺物がある。10は精良な粘土を使用しており、表面ははげているが紅褐色を呈していたことがうかがわれる。底面直径3cmの円柱状の土器であり、足?かとも考えられるが不明品としておきたい。

(Ⅳ)

当遺跡採集の弥生式土器片は、道路工事現場における表面採集であり、須恵器なども混在して確かな資料とはなりえない。しかし甕形土器に見られる前述した二つの種類、すなわち刻み目のある凸帯(1~4・7)と刻み目のない凸帯(5・6・8~10)は当地方の弥生時代後期の特徴をそなえているといえよう。また中空の上げ底(第3図7)もそれを裏付けている。以上の結果から薩摩半島の西海岸の内側の平野部に広く多く分布する弥生時代後期の遺跡地の一つとしてまた新たに加えることができよう。

ここで注目しなければならないことは、かつて筆者が花熟里Ⅰ類⑥とした凸帯文のない甕形土器の破片を1片もみなかったことである。花熟里遺跡より1kmも離れておらず、また標高も地形も似かよった場所で同じ後期の甕形土器の破片の見つからないのが不思議であった。そこで後期の甕形土器について一つの仮説をたて考察を加えてみたい。

中期初頭の甕形土器は入来式でもみられるように、まだ口縁部に倒L字状の凸帯をもち口縁下部には三角凸帯や刻み目凸帯を附している。⑦この系統は益丸や石神遺跡出土の土器形式をへて山ノ口式に至った。⑧山ノ口式はa, b, cに別かれ、aは山ノ口遺跡で最も多い甕形土器で鐘形の胴部に充実した器台をつけ、口縁部は外反し頸部に3~4条の凸帯をめぐらしたものである。Bは胴部にややふくらみをもった深い甕形土器で口縁部は「く」字状に外反している。Cは口縁部外反・平底で断面三角形の凸帯を有し丹塗や精巧な薄い仕上げなどから城ノ越Ⅳ式としている。そしてこれらの関係からその時期については、須久式に近く、弥生中期でも古そうに見えるが、城ノ越Ⅳ式との伴出関係からみて中期の後半と思われる⑨と述べている。以上のように中期初頭における倒L字状の凸帯をもつ口縁部は後半には「く」字形に外反する口縁部に変化している。

弥生後期の甕形土器はどのようなものだろうか。本県における後期甕形土器についてはすでに昭和27年鹿児島県考古学会紀要(第2号)⑩において河口氏が分類している。それによれば、第3様式として頸部が少し内側へくびれ外反りの口縁部を有し頸部に凸帯を附しているもの、底部は中空の器台を附す。第4様式として中津野遺跡の土器をあて、頸部がしまり口縁部が外反し、胴部にふくらみを有し、中空の器台を存するものをあげている。甕形土器を凸帯の有無の相違から2つの様式に分類している。また鹿児島市史⑪においてはA・Bに分類している。Aは笹貫遺跡出土の甕形土器で、直口で胴部のはらない器形をし、器台を付けたのがふつうで頸部に絡縄の凸帯をつけている。Bとして薬師堂・永田川・唐湊遺跡出土の甕形土器で、胴部がはり口縁部は「く」の字形に曲折して外反し、中空の脚台付きの甕であると述べている。Bは前述の第4様式にあたるものと思われる。

さらに弥生式土器集成⑫においては、第Ⅶ様式としてA・B二つに分け、Aとして直口で胴部のはらない器形で脚台をつけたものが普通である。頸部に幅の広い凸帯をつけたもの、断面三角形の凸帯をつけ一部が接して2条となったもの、下腹部に幅の広い凸帯をほどこしたものなどがある。と述べている。Bとして、胴部がはり口縁部が「く」字形に曲折して外反し、中空の脚台

つきの甕であると述べ、BがAより新しい時期のものであることを明らかにしている。以上河口氏の分類によって、後期甕形土器の体系は明確になっているのであるが、これを整理し参考として本県における弥生後期甕形土器を第4図のごとくⅠ～Ⅳ類に分けてみた。ⅠとⅣは鹿児島市史

の巻末の実測図⑬よ

り引用し、ⅡとⅢはその器形をそのままのとして模式的に作製した。以下第4図をもとにして説明してみたい。

- ・第Ⅰ類は頸部がくびれ口縁部はやわらかく「く」字形に外反し、胴部がややふくらむもの
- ・第Ⅱ類は同じカーブを描き、くびれた頸部に刻み目凸帯や絡縄状凸帯を附しているもの。

- ・第Ⅲ類は直口で胴部のはらない器形で凸帯のないもの。

第 4 図

- ・第Ⅳ類は第Ⅲ類に凸帯が附されたもの。凸帯は各種の凸帯を含む。

これを大きくわければⅠ・Ⅱ類は口縁部が外反するものであり、Ⅲ・Ⅳ類は口縁部は直線的に外びらき、ないし直立、やや内湾するものである。またⅠ・Ⅲ類は凸帯のないものⅡ・Ⅳ類は凸帯は凸帯のあるものと分けることができる。Ⅰ～Ⅳ類間にはその中間形態というべきものもあると思われるが、ほぼこの4つの中にあてはまるのではないかと考えた。

現在までの資料で遺跡地名ごとに調べてみると次のようになる。

類別	遺 跡 地 名	分 献
Ⅰ	花熟里・尾下・永田川・入来・木谷	鹿児島県考古学会紀要(第2号)第4様式
	唐湊・成川・牛尾・中津野・薬師堂	鹿児島市史B, 弥生式土器集成B 鹿児島考古第5号花熟里Ⅰ類
Ⅱ	花熟里・尾下・中津	鹿児島県考古学会紀要(第2号)第3様式 鹿児島考古第5号花熟里Ⅱ類

類別	遺 跡 地 名	分 献
Ⅲ	千束・中津野	
Ⅳ	宮内・笹貫・県立医大・山根・ 城ノ上・指宿	鹿児島市史 A

中期後半の山ノ口式と後期に比定されているⅠ～Ⅳ類の甕形土器を比較してみると、そこには大きなちがいが見出される。まず中期に盛行した頸部の3～4条の三角凸帯文がなくなったことであろう。Ⅱ・Ⅳ類にも凸帯文はみられるが山ノ口式の整然とした凸帯に比して、作りが粗雑で荒いものが多い。また底部の充実した器台から、中空上げ底へいう突発的な変化がみられる。この底部の大きな変化は甕形土器の機能上の問題、土器製作の技術上の問題、他地域より南九州への文化の流入の問題などにかかわるものではないかと考えられ、今後追求しなければならない重大な課題のように思われる。

以上のような形式変化をのぞいて、口縁部の変化のみに着目して次のような仮説をたててみた。すなわち山ノ口式のあとにくるものはⅠ類の土器ではないか。若干説明を加えてみよう。山ノ口式の「く」字形の口縁部は内面に陵線を残し、器体の口縁部に外びらきの凸帯を附したという感じが強く、また口縁内面に接着の痕跡を残すものが多いといわれる。すなわち前期以来の倒L字形の凸帯が大きく上向きになったと考えてよいのではないか。次にくるⅠ類土器は、完全に口縁部に凸帯を附するという概念からぬけ出ており、器体そのものがやわらかく「く」の字形にカーブを描いており、したがって内面の陵線も消えている。それに現在判明の後期の甕形土器の資料からでは、Ⅲ類あるいはⅣ類の直行口縁への変化はあまりにも形式段階がひらきすぎているのではないか。このⅠ類土器に関しては共伴の壺形土器の関係から以前筆者は後期前半と比定している。⑭以上論述してきたことは、あくまでも形式論からくる仮説であり、今後これを実証する、山ノ口式と後期土器との層位関係などを確かめなくてはならない。これからの研究の問題点としておきたい。ちなみに河口氏はⅠ類はⅣ類よりも新しいとしている。⑮また他県においては土師式の中に類似のものが多数みられる。⑯

Ⅰ～Ⅳ類の特徴をあと少し述べる。Ⅰ類は器面の調整がくし目刷毛目状のものでいねいに仕上げられているのが多いのに対し、Ⅲ・Ⅳ類は刷毛目および篋けずりのあとを残すものが主となる。またⅡ類の凸帯数は1条がほとんどで、刻み目凸帯および絡縄状凸帯をなす。Ⅳ類にある巾広い凸帯やかまぼこ状の凸帯などはみられない。このⅣ類は上記の凸帯のほか第2図に見る刻み目のかわりに指で押して刻み目をあらわすもの、これはその指押文の数が少なくなり1～2になることもある。また絡縄状の凸帯もみられ、施される場所も口縁直下、上胴部、下腹部と各種に分かれている。凸帯数は1条である。

上記のようなちがいが地域的特色によるものか、新旧の差によるものか、同時期の異種の型式であるのか、あるいは機能上のちがいによるものかは今後の課題として取り組まなければならない問題である。以上のような視点で本遺跡の土器をとらえてみた。ここにとりあえずかねて考え

ていた本県における弥生時代後期甕形土器の型式を仮説として4つに分けて提唱を試みたのである。多くのご指導、ご叱正をお願いしたい。

参 考 文 献

- ①河口貞徳・出口浩 1971 第一次花熟里遺跡調査報告 鹿児島考古第5号
- ②吹上町教育委員会 1970 入来遺跡発掘調査概報
- ③県立吹上高等学校 社会研究部 ふきあげ第7号
- ④弥生式土器集成 南九州地方 河口貞徳 第Ⅴ様式の小形壺形土器Aとして類似の器形がある。
- ⑤④に同じ。第Ⅴ様式の高 形土器として「杯部はたいらな円板状の底と口縁部とのつぎ目に、明瞭な凹線を残したものが一般的である」とし城元遺跡のものを集成している。
- ⑥①に同じ
- ⑦河口貞徳・出口浩 1971 南九州弥生式土器の再編年 鹿児島考古第5号
- ⑧河口貞徳氏の御教示による。
- ⑨河口貞徳 山ノ口遺跡 立正考古 第21号 立正大学考古学研究会 1962
- ⑩河口貞徳 鹿児島県の弥生諸遺跡について 鹿児島県考古学紀要(第2号) 1952
- ⑪河口貞徳 原始時代 鹿児島市史Ⅰ
- ⑫弥生式土器集成・南九州地方・河口貞徳
- ⑬⑪に同じ
- ⑭①に同じ
- ⑮⑫に同じ
- ⑯土師式土器集成1 杉原荘介・大塚初重編 東京堂出版 1971 埼玉県の五領遺跡出土の甕形土器BというⅠ類と似た土器があり、前野町式土器の台付甕形土器との関連を述べている。球形にふくらんだ胴部が目につく。